

中世後期以降の四拍動詞 アクセント体系についての史的考察

上野和昭

キーワード：アクセント史・アクセント体系・動詞アクセント・類推・アクセント型の統合

0. はじめに

動詞アクセントの体系変化を考える場合には、体系による強制力（類推力）という観点ばかりでは、その説明は困難である。いわゆる音韻変化がこの力を超越して働き、それによって体系内部の力関係に変化が生じ、その不均衡を均すように体系が組替えられるという過程が、ふつう一般に考えられるモデルであるが、これに加えて、あるアクセント型と、それに類似した別のアクセント型とが、型の統合を起こすことがあり、これもやはり体系の強制力以上に作用する。このことについては、以前2拍・3拍の動詞や形容詞を素材にして指摘した（上野 1993・1995）。本稿では、これを4拍動詞アクセント体系の史的変化（主に中世後期以降）に適用して、従来の説明の問題点を指摘し、これに新たな解釈を施そうとするものである。また、4拍動詞はそれだけの閉じた体系を形成するものではないので、動詞の体系全体からの考察が必要になること、言うをまたない。

扱う地域は、歴史的に変化を辿れる京都アクセントについてであるが、問題の性質上、近畿中央式の現代諸方言アクセントに言及する。そのような地域として、ここでは、従来取り上げられてきた高知市・和歌山県田辺市・同日高郡龍神村・大阪市などに加えて、徳島市ならびにその周辺もこれに加える。とくに徳島市の南の阿南市や羽ノ浦町近辺は徳島市よりも古いアクセントを残しているので、いまこれらをまとめて、仮に「阿波」アクセントとよぶ。

方言資料はおもに佐藤栄作編『アクセント史関係方言録音資料』（1989）によるが、徳島市・阿南市・那賀郡羽ノ浦町については筆者自身の調査結果を用いる。また一部、平山輝男編『全国アクセント辞典』（1960）の京都アクセント、同じく『現代日本語方言大辞典』（1992-94）の高知・徳島・大阪・京都のアクセント、「日本語音声」の音声データベース「全国共通項目(1)」の京都市の録音資料などを参照した。

なお、ここに扱う動詞は連体形の拍数で数えて2拍動詞とか3拍動詞などとよぶが、類別と活用の種類を加えて、たとえば4拍動詞第1類5段活用を4V1<5>などと簡略に表示することとする（2V1<2>は2拍動詞第1類2段活用、3V2<4>は3拍動詞第2類4段活用といった具合）。さら

にアクセントの高拍を●で、低拍・下降拍をそれぞれ○、◐であらわす。ときにアクセント型を示す際にH1型（高起式1拍目に核）、L0型（低起式無核）などの表示法をもちいることもある。またたとえばH(-2)型などとあるのは、高起式で後ろから2拍めに核がある型をさす。

1. 近世中期頃の動詞アクセント体系とその変化

まず近世中期の京都における動詞アクセントの体系【表1】から説きはじめたい。それは中世後期以降で、現代を除けばもっとも明確に体系が把握されている時期だからである。この体系は、ほぼ平曲譜本から推定されている。いま後に比較する現代諸方言アクセントとの関わりから、終止・連体形、連用形、未然特殊形、命令形のみを掲げる。この表は主として奥村三雄（1981 pp.359-360）による（一部筆者が加筆したところもある）。類別は古代アクセント（鎌倉時代以前）からの経緯によって分けられているが、南北朝期頃とされる「体系変化」の後は必ずしもそれが適当とはいえない。

【表1】近世中期頃の京都における動詞アクセントの体系

	代表語形	終止・連体形	連用形	未然特殊形	命令形
2V1<1>	キル(着)	●●	●/◐	●	◐
2V1<4>	オク(置)	●●	●○	●●	●○
3V1<2>	スツル(捨)	●●●	●○	●●	●○
3V1<4>	オクル(送)	●●●	●●○	●●●	●●○
4V1<2>	カサヌル(重)	●●●●	●●○	●●●	●●○
4V1<4>	カナシム(悲)	●●●●	●●●○	●●●●	●●●○
2V2<1>	ミル(見)	○●	●/◐	○	◐
2V2<4>	トル(取)	○●	○●/○◐	●○	○◐
3V2<2>	ウクル(受)	●○○	○●/○◐	●○	○◐
3V2<4>	ウツル(移)	●○○	●○○	●●○	●○○
4V2<2>	オソルル(恐)	●●○○	●○○	●●○	●○○
4V2<4>	アラワス(表)	●●○○	●●○○	●●●○	●○○○
3V3	アルク(歩)	○●●	○●○	○●●	○●○
4V3	ササグル(捧)	○●●●	○●○	○●●	○●○

この表によると、近世中期頃の京都では動詞アクセントは大きく三つまたは二つに分類できるのであるが、その基準のとり方で様相が異なる。もし終止・連体形のアクセントで分類するならば、いわゆる1類動詞と、2V2ならびに3V3・4V3とが高起無核・低起無核ということで対立し、そのほかに3V2・4V2のような高起有核のものがあったということになる。

これを動詞の活用形のなかでもっとも頻用される連用形のアクセントで分類するならば、2V2<4>と3V2<2>とは低起だということで3V3・4V3に類似し、3V2<4>や4V2はむしろ1類動詞の方に類似する。現在までのところ2V2<1>については、その去就がはっきりしない。

近世以降現代までの動詞アクセント体系の変化は、終止・連体形よりはむしろ連用形アクセン

トの類推力が強く、ほぼこの力によって体系の組替えが行われている。すなわち連用形アクセントが高起のものと低起のものという二つの類型にまとまろうとしているのである。

そのような観点からこの間の体系の変化をみると、大きくは四つのことを指摘できる。その第一は4拍動詞の第1類(4V1)と第2類(4V2)とが第1類の方に統合する変化である。第二は、3拍動詞第2類<2段活用>(3V2<2>)、現代語ならば1段活用=3V2<1>)の語が第3類(3V3)に類推する変化、そしてこれに連動して起こる2V2<4・5>の否定形(未然特殊形に打消しの助動詞またはンが接続した形、例「書かん」)と意志形(未然特殊形に意志の助動詞ウが接続した形、例「書こう」)が●○○から○○●へと変化し、2V2<1>の意志形(例「見よう」)も同様な変化をするが、これが第三。さらに第四として3拍動詞第2類<4段活用>(3V2<4>)、現代語ならば5段活用=3V2<5>)の語が第1類(3V1)に類推してそれに統合する変化が挙げられる。このうち、ここで取り上げるのは第一の問題である。

2. 近世中期頃の4拍動詞(4V)アクセントの実態

4拍動詞第2類(4V2)は、その活用の違い(4段か2段か)にかかわらずみな最終的には第1類に合同する。その結果、現代京都では、終止・連体形でいえば●●●●と○○○●との両類にまとまってしまう。後者は【表1】の4V3が遅上がりに変化したかたちでしかないが、前者は4V1が4V2を室町時代以降長い時間をかけて吸収したものである。

じつは近世中期にも、このような動きはみとめられる。【表1】では理解の便を考慮して単純にしたが、ここに『平家正節』(東大本)によって⁽¹⁾、古代アクセントに確証のある語を取り上げて調べてみたところ、【表2】に#印を付けたような不規則なアクセントを反映していると思われる譜記が、一部にあった。これらは全体の数としては多くはないが、注意すべきものである。

【表2】『平家正節』にみえる4拍動詞のアクセント(*は推定型)

	終止・連体形	連用形	未然特殊形	命令形
4V1<2>	●●●●	●●○ #2●○○	●●●	●●○
4V1<4>	●●●● #1●●○○	●●●○ #3●●○○	●●●●	●●●○
4V2<2>	●●○○	●○○ #4●●○	●●○	●○○
4V2<4>	●●○○	●●○○ #5●●●○	●●●○	*●○○○
4V3	*○●●●	○○○	*○●●	○○○

#1~#3は第1類の語の終止・連体形や連用形に第2類のアクセントがあらわれたものであるし、#4と#5は逆に第2類の語の連用形に第1類のアクセントがあらわれたものである⁽²⁾。

連用形に混同が著しいことははっきりしているが、それぞれの語が個別に変化しているとい

うわけでもなく、同じ語であっても連用形に変化形がみられるのに終止・連体形は変化していない（たとえば「いとなむ舁に〈上上××〜〉5下逆槽25-1口説」と注(2) #5とを比較されたい）とか、同じ語の連用形でも変化形と非変化形とが混在する場合（たとえば以下の例など。「憐む」は4V1<4>、「争ふ」は4V2<4>）がある。

憐んで〈上上×××〉 5下判官22-2白声 / 慍んで〈上上上中中〉 五句高野16-1指声
 憐み給ふ〈上上コ×〜〉 2上文強15-3口説（ほか2例）

争ひ申さゞりける〈上上コ×〜〉 11下西光44-4口説

争ッひて〈上上×××〉 揃物大衆 6-2白声 / 同 〈上コ×××〉 5下千寿 5-4口説

これらはまだ変化というよりは、一部に見られるわずかな「混同」または「ゆれ」という方がよいような状態であり、また後の第1類に統合するという方向すら明確とはいえない。奥村三雄（1981 p.361）がこの程度のアクセントのゆれを表示しなかったのも当然であろう。

近松浄瑠璃譜本を資料として論じた坂本清恵（1990 p.164）によれば、近世初期の大阪アクセントにおいて、連体形に一部4V1<2>と4V2<2>との混同・ゆれの例があるようだが、とくに4V1<2>の「とどむる・うかぶる」が●●○○を示すことについて「史的アクセントからは、●●●●であったはずだが、その変容の●●●○・●●○○で実際には語っていたものか」と述べる。「変容」とは音楽的な意味での変容であろうか。坂本（1991）によると、4拍動詞2段活用連用形は、連用中止形や複合動詞前部要素の場合には●○○が優勢、助詞・助動詞接続形は●●○も●○○と同程度に認められるという。「胡麻の持つ意味についてはまだ不明な点もある」としているが、この場合も4V2<2>と4V1<2>との間にゆれがあったと見ることができよう。

3. 近世初期以前の4拍動詞アクセント体系と同第2類4段活用（4V2<4>）連用形の問題

しかし後世の変化との関連で捉える場合には、この問題は重要である。もう少し遡った時点から事態を検討しておかなくてはならない。

【表3】鎌倉時代から室町時代にかけての4拍動詞アクセントの変化

	終止・連体形	連用形	未然特殊形	命令形		終止・連体形	連用形	未然特殊形	命令形
4V1<2>	●●●●	●●○	●●●	●●○	=	●●●●	●●○	●●●	●●○
4V1<4>	●●●●	●●●○	●●●●	●●●○	=	●●●●	●●●○	●●●●	●●●○
4V2<2>	○○●	○○●	○○○	○○●	>	●●○○	●○○	●●○	●○○
4V2<4>	○○●	#○○○	○○○○	○○●	>	●●○○	#●●○○	●●○○	●○○○

もともと4V1と4V2とは、鎌倉時代以前には【表3】の左側のような体系であった。それが室町時代になると右側ようになる。4V2では○○●>●○○や○○○●>●●○○のような音韻変化がほぼ一律に起こっているが、ただ一箇所4V2<4>の連用形（#印）が○○●○>●○○○とならずに、●●○○になっている点が注意される⁽³⁾。

これについて金田一春彦（1964 pp.392-394）は、2拍・3拍動詞の連用形への類推から鎌倉

時代後期の連用形アクセントは○○○●に変化していたと推定した。そうすれば○○○●>●●○○は規則的変化になる。桜井茂治(1984)も処々にこの説を引用しているが、奥村三雄(1986 p.350)は、現代京都で●●○○型をとるものには「平曲資料当時以降に」●○○○型から変化したものが多いとして、ここにいう4V1<4>の連用形を例に挙げている。また奥村(1993 p.39)にも「中世半ば頃以降に●○○○→●●○○の規則的変化をおこした語類」としている。いま「平曲資料当時以降」と「中世半ば頃以降」とを同じことと考えれば、これは明らかな解釈の相違ということになる。

それでは、室町・江戸時代の資料で4V2<4>の連用形はどのようにあらわれるのであろうか。さしあたり江戸時代中期頃までのアクセントを反映するとされる『平家正節』(東大本)を検討してみるに、これらはすべて●●○○であって、●○○○はみない。桜井(1984 p.794-865)によれば、中世の資料として利用されることの多い『仮名声』と『開合名目抄』にそれぞれ1例ずつ●○○○(コトハリ<徴角角角>仮名声54-2/シタガ(ッ)テ<徴角角角>開合名目抄29ウ5 いずれも<徴>は高拍、<角>は低拍を反映するものと解釈される)があるという。ただし「従ふ」は古く1類語で、それを室町時代に類を混同して2類のアクセントも行われた際の連用形アクセントということになる。これらを桜井(1984 p.240-865)は○○●○からの変化形だと説明する。さらに坂本清恵(1994)によれば、後水尾院の古今伝授に関わる中院文庫本『古今和歌集聞書』『古今聞書』(ともに京都大学附属図書館蔵)に次の例があって、ここにも●○○○が「誘ふ」の連用形にみられる。中世末期から近世初期頃の資料とみて誤らないであろう。(ほかに「いぶかり」もあるが、これは●●○○)

いざなひて<上平濁平平>(声点) 古今和歌集聞書12オ8

いざなひ<上下下下>(胡麻点) 古今聞書1-14オ4

このように室町以降の4V2<4>連用形●○○○の例はきわめて少ない。ただ、桜井のいう古い連用形アクセント○○●○からの直接の変化形であるならば、その成立は変化の完了した室町時代初期であったはずだから、多数型●●○○とともに少数型●○○○も、(後水尾院の時期まで少なくとも)二百年は併存したということになる。奥村和子(1995 p.67)は、「動かす・悩ます・励ます」等「語構成から考えれば三音節二類動詞特殊未然形+助動詞「す」で○○○●になっているはずのもの」を指摘して、「文献に現れなかっただけで、○○●○型と共に○○○●型も存在していたのではないか。むしろ○○○●型から○○●○型が生まれた可能性も考えられる」という。しかし、一語の動詞としてすでに○○●○型をとっていたことは、たとえば図書寮本『類聚名義抄』(1976 勉誠社版 18-5/45-2/83-6)などの例に徴して明かであるから、ここはやはり古い連用形は○○●○として考えるのが順当であろう。

といって奥村三雄のように、鎌倉後期に○○○●を想定せずに、○○●○>●○○○>●●○○○という「規則的変化」を考えるのも、それがいわゆる音韻変化並みのものとした場合、3拍名

詞第3類にガのような一般の助詞が接続したものなどに、中世後期を通じて同様な変化が起こらない点やはり疑問が残る。「●○○○→●●○○の規則的变化」を想定することに問題がありはしないだろうか。

ここに私見を述べるならば、【表1】において明らかなように、すでに中世後期には、

1 類動詞： 終止・連体形 H0型 連用形 H(-2)型

3V2<4>/4V2<2・4>： 終止・連体形 H(-3)型 連用形 H(-3)型

という体系ができていたと解釈されるのであるから、4V2<4>の連用形は（たとえ一時的に●○○○があらわれることはあっても）H(-3)型の●●○○の方が体系内のおさまりがよかったはずで、そのために室町時代から江戸時代にかけて、この型が定着していたのだと説明する方がよいと思う。そこに●○○○から●●○○への変化が想定できても、それは音韻変化ではなくて体系の均整をめざす類推変化であったのではないか⁽⁴⁾。

4. 4拍動詞アクセントのゆれから合同への跡付け

さて、4V2<2>について奥村三雄（1990 pp.589-590）は、4V1<2>の連用形が●●○から●○○への変化を起こして4V1<2>と合併したために、その影響で、他活用形も漸次合併して行ったと考え、ほぼ全体としては3V1<4>と3V2<4>との合同に準ずる面が多いと述べている。

	終止・連体形	連用形	未然特殊形	命令形
4V1<2>	●●●●	#●●○	●●●	##●●○
4V2<2>	##●●○○	●○○	##●●○	●○○

上に#印を付けた連用形に●●○>●○○の変化が起ったとすれば、##印の箇所にも同様な動きがあらわれてよいはずで、その結果として下のような状態にいったんはなったのであろう。

	終止・連体形	連用形	未然特殊形	命令形
4V1<2>	●●●●	●○○	●●●	●○○
4V2<2>	●○○○	●○○	●○○	●○○

このような4V2<2>のアクセントは徳島市の高年層のなかに聞くことができるし、合同の契機として#や##の変化が指摘し得ることは、3拍動詞の体系についても述べたことがある（上野1993）。しかし、これならば結果として4V2<2>の方向に類推がはたらいてもよかったはずで、所属語彙も4V2<2>の方が多そうであるし、それ自体のかたちもみなH1型で均整がとれていて、記憶の経済という点でも有力である。それなのに現代ではみな4V1<2>の方に動いているのはなぜであろうか。

奥村は3V1<4>に3V2<4>が類推した変化に「準ずる面が多い」と示唆的にいうが、どのように類似し、どのように相違するかを検討してみたい。まず類似する点は、徳島市などで3V2<4>と4V2の変化がほぼ徹底するのは、およそ現在30代以下の人たちである。すなわち両変化はほぼ時

期を同じくして終了する⁽⁵⁾。

ところが、そのはじまる時期はずいぶん異なる。平曲譜本では4V1と4V2とに混同があったことすでに述べたが、3V2<4>は終止・連体形●○○、連用形●○○であり、3V2<2>も同じく●○○、○●（または○●）で一定しているし、徳島市でも高年層のアクセントは平曲譜本とほぼ同様である。これに対して4V2の方は、両活用ともに高年層であっても一定しない。語によって変化の早いものと遅いものがあり（上野 1994）、それが中央語でやはり3V2が安定していた時期（近世中期以前）に4V1・2が揺れていたことと関係しているのではないかと考えられる。

それでは室町時代や江戸時代初期ではどうであったのか。桜井（1984）によれば、そのような4V1と4V2との間のゆれは、その時代にも相当あった模様である。ただ桜井は多くの場合、扱った資料が論議書であることから音楽的な問題と考えたり、語それぞれの個別的問題、さらには一時的なこととして処理するのであるが、なかに4V2<2>の連用形に●○○と並んで●●○もみえることに関して、活用形全体が、連用形や未然形以外みな●●○のように最初の二音節が高い型になったことに連用形も類推したと説くところがある（p.858/pp.1059-1060/pp.1077-1078/p.1260）。この考えならば、4V2<2>の側から4V1に変わっていくことについて説明できるが、実際には室町・江戸時代の例には逆方向への類推もみられ、その動きが一定しない。さらに連用形が他の活用形に類推するというのは、動詞の場合あまり一般的とはいえないように思う。またもし桜井のいうようなことがあったのなら、4V2<2>の連用形が●●○になったのを機に、終止・連体形にも●●●への変化が一斉に起こりそうなものだが、なお事態は混沌としているのである。

さきに引用した中院文庫本『古今和歌集聞書』および同時代のアクセント資料と考えられる『源氏清濁』でも（坂本 1994）、4V2<4・2>の「そよめく・類ふ・側む」の終止・連体形や連用形に4V1<4・2>のようなアクセントを表示した例があり、

そよめく <上上上上>（声点） 源氏清濁 8ウ5上

たくへて <上上濁平平>（声点） 古今和歌集聞書10ウ12

そはめたる <上上濁平平>（声点） 源氏清濁 8ウ5下

また一方で4V1<4・2>の「さへづる・始む」の終止・連体形や連用形に4V2<4・2>のようなアクセントを表示した例がある。

さへつる春は <上上平濁平～>（声点） 古今和歌集聞書 4オ10

はしめたり <上平平○○>（声点） 古今和歌集聞書 8オ14

これらのことを要するに、室町時代以降少なくとも江戸時代中期までは、4V1と4V2との間にゆれがあるとはいえ、まだ一斉に4V1へと類推合同する段階には至っていないのである。

5. 4拍動詞アクセントのゆれと合同の原理

それではなぜこの両者はゆれを長期間つづけたのであろうか。もう一度室町時代以降の4拍動詞のアクセント体系（【表3】の右側）を検討すると、①4V1<2>と4V1<4>とは終止・連体形H0型、連用形H(-1)型など類似点が多く、4V2<2>と4V2<4>ともこれまた終止・連体形、連用形ともにH(-3)型という点からそれぞれが活用の違いを越えて一体の関係に近かったということがまずいえよう。つぎに②頻出する連用形について4V1<4>●●●○と4V2<4>●●○○とは、頭から数えればH3型とH2型という具合に紛れやすくなっていたことが指摘できる。ただ一方で、連用形H(-2)型：H(-3)型という対立もあったから、完全に混乱するにはなお時間を必要としたのであろう。加えて③4V2を体系的に支えるべきものは3V2<4>くらいしかなく、当時の動詞アクセント体系内での不安定さも混乱の一因と考えられる。ただ●●○と●○○と、また●●○○と●○○○との型の統合を混同・ゆれの契機にするのであれば、それは近世中期にはまだ起こっていなかったのであるから、それ以前には4拍動詞にゆれが起こっていようはずがない。しかし、実際はそのような時期にもゆれはあったのであり、ゆれの原因は別に求められなければならない、それが上記①～③であると考えられる。ただ①と③とは「ゆれ」の環境ではあっても、決してその契機ではない。契機とすべきは②である。

すなわち、中世後期以降、H2型●●○○とH3型●●●○とは型の統合を起こし、4V1<4>の連用形H3型は、4V2<4>の連用形H2型と区別が難しくなったものと推定する。もちろん、4V1<4>の連用形は動詞体系としては同時にH(-2)型でもあり、同じく4V2<4>の連用形もH(-3)型でもあったから、型統合の力と体系的強制力が心理的に競い合っていたものと考えられるのである。ここに混同・ゆれが生じる契機があった。それが①③という状況の中で、2段活用にも及んだものと思われる。

つぎに変化が完了するのはどういう事情かについて述べる。それは近世後期以降に●●○と●○○と、また●●○○と●○○○とが統合したために⁽⁶⁾、まず3V2<2>が3V3へと類推し、対する3V2<4>がこれに遅れて3V1の側へと類推して、動詞アクセント体系が高起と低起の二式に再編成されたとき、同時に4V2も4V1へと残らず動くのである。4V2が3V2のように活用によって分れなかったのは、ひとえに連用形アクセントがほぼ一致していたことによる。その結果できあがったのが、【表4】の現代京都や一部違いはあるが大阪や徳島（若年層）の体系である。

高起式の方は、終止・連体形H0型、過去形（連用形に助動詞タが接続する形）H(-3)型となり、一方低起式の方は、同じくL0型、L2型となる。表で#1は体系の強制により「着た」をキータ●○○にいうところがある（高知・阿波など）。#2は高知・田辺・龍神、それに徳島・阿南・羽ノ浦などの阿波アクセントで●●○○が聞かれ、#3も阿波では●●○○も聞かれるから、京都でもかつて一時は体系的におさまりのよいH(-3)型であったと思われる。それが今日●○○○なの

【表4】現代京都における動詞アクセントの体系

	終止・連体形	過去形	否定形	意志形	禁止形	命令形
2V1<1>	●●	#1●○	●●	●●●	●●○	●○
2V1<5>	●●	●○○	●●●	●●●	●●○	●○
3V1<1>	●●●	●○○	●●●	●●●●	●●●○	●○
3V1<5>	●●●	#2●○○○	●●●●	●●●●	●●●○	●●○
3V2<5>	●●●	#3●○○○	●●●●	●●●●	●●●○	●●○
4V1<1>	●●●●	●●○○	●●●●	●●●●●	●●●●○	●●○
4V2<1>	●●●●	●●○○	●●●●	●●●●●	●●●●○	●●○
4V1<5>	●●●●	●●●○○	●●●●●	●●●●●	●●●●○	●●●○
4V2<5>	●●●●	#4●●●○○	●●●●●	●●●●●	●●●●○	●●●○

2V2<1>	○●	#5●○	○●	○●● #6(●●●)	○●○	●○
2V2<5>	○●	○○● #7(○●○)	○○●	○○●	○○○	○●
3V2<1>	○○●	○●○	○○●	○○○●	○○●○	○●
3V3	○○●	○●○○	○○○●	○○○●	○○●○	○●○
4V3	○○○●	○●○○	○○○●	○○○○●	○○○●○	○●○

は、体系的強制よりも型の統合の方が有力にはたらいっているであろう。#4は「日本語音声」(1990)、平山輝男(1960ed.)による。大阪や徳島(若年層)でも●●●○○である。ただし平山(1992-94ed.)ではアツマツク●●○○○とする。低起式では2V2<1>の連用形が鎌倉以前はともかく室町以後は●ないし○であって低起式にならない。ために#5は体系の例外をなす。この関係で高起式に類推した意志形(#6)が報告されている(佐藤1989 p.31)が、大阪・徳島(若)は○○●。#7は多く音便形をとるので○○●になるが、高知などはクータ(食)○●○で、これの方が本来の形である。なお、ここにいう禁止形とは禁止の助詞ナが接続した形である。

6. 近畿中央式諸方言アクセントにみる4拍動詞アクセントの合同の過程

高知・田辺・龍神などと同様に徳島県の東半に聞かれる高年層のアクセントは、現代京都アクセントよりもやや古い様子をみせている。さすがに高知は3V3アルクや4V3カカエルなどに○●●●、○●●●のような早上がり型の型をみせて古色が顕らかであるが、残る地域も3拍形容詞ク活用の類別を残していたり(徳島市などではもはや失われているが、阿南市・羽ノ浦町近辺はこれを残す)、3拍動詞第2類に変化が起こっていないなどの点でアクセント史的に興味深い。ここにこれらの地域の動詞アクセント体系を、代表的なアクセントによって示せば以下の【表5】のようになる。

ここには記さなかったが、意志形には短呼形なども聞かれ、禁止形(禁止の助詞ナの接続した形)にはキルナ・ミルナなどのほかにキナ(着)・ミナ(見)●○、ウエナ(植)●○○、オキ

【表5】近畿中央式諸方言における動詞アクセント体系

	終止・連体形	過去形	否定形	意志形	禁止形	命令形
2V1<1>	●●	●○	●●	●●●	●○○	●
2V1<5>	●●	●○○	●●●	●●●	●○○	●○
3V1<1>	●●●	●○○	●●●	●●●●	●●○○	●○
3V1<5>	●●●	●●○○	●●●●	●●●●	●●○○	●●○
4V1<1>	●●●●	●●○○	●●●●	●●●●●	●●●○○	●●○
4V1<5>	●●●●	●●●○○	●●●●●	●●●●●	●●●○○	●●●○
2V2<1>	○●	●○	○●	●○○	○○●	●
2V2<5>	○●	○○●	●○○	●○○	○○●	○●
		○○●				
3V2<1>	●○○	○○●	●○○	●○○○	●○○○	○●
3V2<5>	●○○	●○○○	●●○○	●●○○	●●○○	●○○
4V2<1>	●●○○	●○○○	●●○○	●●○○○	●●○○○	●○○
	●○○○		●○○○	●○○○○	●○○○○	
4V2<5>	●●○○	●●○○○	●●●○○	*●●●○○	●●●○○	●●○○
	●○○○	●○○○○	●●○○○	●●○○○	●○○○○	●○○○
			●○○○○	●○○○○		
3V3	○●●	○●○○	○●●●	○●●●	○●○○	○●○
	○○●		○○●●	○○●●	○○●○	
4V3	○●●●	○●○○○	○●●●	○●●●●	○●●○○	○●○
	○○●●		○○●●	○○●●●		

ナ(起) ○●○、ワスレナ(忘) ●●○○、アツメナ(集) ●○○○、カカエナ(抱) ○●○○などがある。またとくに龍神では2段活用語形(たとえばアクル(開)・オクル(起)など)が聞かれる。さらに徳島市では○○●●よりは○○○●が一般的になっている。

4拍動詞にいろいろな変化形もみられることを除けば、およそ【表1】の体系と同じである。上述のように3V2に類推変化が起こっていないし、これに連動する2V2<1>意志形ミヨ(見)や2V2<4>の否定形カカン・意志形カコー(書)などに、いまだ●○○から○○●への変化もない。これを【表1】および【表2】と、【表4】との中間に位置づけてみたい。それがアクセント史上、近世と現代との間隙を埋めることになるからである。

ここに4V1と4V2とを抜きだして、さらに諸方言に聞かれる少数型をも書き加えたものが【表6】である。(田辺・龍神については4V1<5>・4V2<5>の資料を欠く。また高知は4V1<5>・4V2<5>の一部を平山(1992-94ed.)で補う。ほかは佐藤(1989ed.)と筆者の調査による)略号は、高知=K・田辺=T・龍神=R・阿南=A・羽ノ浦=H・徳島=TK。とくに地域の記載がないところは、これら諸方言に差がないということである。網掛部分に類推型が認められる。被調査者はおおむね60歳代以上の高年層である。ただし徳島市以外は多人数調査ではないので、【表6】は必ずしも類推変化の進行の程度を反映するものではないが、それでも以下のようなことが指摘できる。

【表6】近畿中央式諸方言に聞かれる4拍動詞アクセント

	終止・連体形	過去形	否定形	意志形	禁止形	命令形
4V1<1>	●●●●	●●○○	●●●●	●●●●● ワスレヨー(T・A・H) ●●●●● ワスリョー(K・R) ワスレヨ(TK)	●●●○○ ワスレナ(T・A・H) ●●●●○ (K・TK)ワスルナ(R) ●●○○○ ワスレナ(K・A・H)	●●○ワスレ (T・A・H・TK) ワッスエ(H)モ ●●● ワスレ(K・R) ●●●●(K)
4V1<5>	●●●●	●●●○○	●●●●●	●●●●● (A・H・TK)	●●●○○ (A・H・TK) ●●●●○ (A・H・TK)	●●●○
4V2<1>	●●○○ (K・A・H・TK) ●○○○ (A・H・TK) ●●●● (T・R・A・H・TK)	●○○○ (K・A・H・TK) ●●●● (T・R・A・H・TK)	●●○○ (K・A・H・TK) ●○○○(TK) ●●●● (T・R・A・H・TK)	●●○○○ (A・H・TK) ●●○○ ハナリョー(K) ●○○○○ (H・TK) ●●●●● (A・H・TK)	●●○○○ (H・TK) ●○○○○ (A・H・TK) ●○○○ ハナレナ(K・H) ●●●●● (T・A・TK) ●●●●● (R・H) ●●●●(A) ●●●●(H)	●○○ (K・A・H・TK) ●●○ (T・A・H・TK) ●●●● (K・R)
4V2<5>	●●○○ (K・A・H・TK) ●○○○(TK) ●●●● (A・TK)	●●○○○ (K・A・H・TK) ●○○○○ (TK) ●●●●● (TK)	●●○○○ (K) ●●○○○ (A・H・TK) ●○○○○ (TK)	*●●○○○ ●●○○○ (A・H・TK) ●○○○○(TK) ●●●●●(TK)	●●○○○ (A・H・TK) ●○○○○(TK) ●●●●●(TK) ●●●●●(TK)	●●○○ (A・H・TK) ●○○○ (TK) ●●●● (TK) ●●●● (TK)

- [1] 4V1には変化の様子がほとんどなく、4V2にのみ変化が認められる。
- [2] 4V2<1>と4V2<5>との間に変化の差は、とくに認められない。
- [3] 高知で4V1<5>の命令形に、1類のなかでただ一つ類推型が認められる。
- [4] 高知には非類推型が多く、田辺・龍神・阿波は類推型が混じる。
- [5] 阿波に●●○○○と●○○○○、●●○○と●○○○との統合が著しい。
- [6] 田辺・龍神は4V3に早上がりの○●●●などが聞かれるのに(佐藤 1989ed.p.44ff.)、4拍動詞の変化は比較的早そうである。阿波では遅上がりに移行していても、4V2の非類推型が頻繁に聞かれる。

[1]は、かつて近世中期以前に4拍動詞がゆれていたことを考えると、その後まず4V1が安定

して、その結果として4V2が不安定のまま残ったらしいことをうかがわせる。[2]については、徳島市内の多人数調査から、4V2<5>と4V2<1>とは一緒に変化しているらしいことがうかがえる⁽⁷⁾。[3]は、ただ1例であるから慎重になるべきであろうが、かつて4V1もゆれていた痕跡を高知アクセントが今日に伝えているものかもしれない。[4]のことからしても、その可能性はあるか。[5]は阿波アクセントに顕著な特徴といえそうであるが、歴史的变化の跡を反映しているものとする。[6]は調査語彙の問題、あるいは被調査者の問題などかもしれない。

7. おわりに

以上4拍動詞アクセントの変化の様子を歴史的に跡付け、さらに近畿中央式諸方言アクセントによってこれを補ってみた。それによれば、近世中期以前にゆれを見せていた4拍動詞は、その後まず4V1が安定して、その結果として4V2が不安定のまま残り、さらに現代に至る間に4V2が4V1へと類推合同した、という経緯が明確になってきた。最後の類の合同を徹底したのは、動詞アクセントの両極再編（終止連体形でいえば、高起式無核型と低起式無核型という両極に編成し直される）という動きであった、ということになる⁽⁷⁾。

室町時代以降、京都の動詞アクセント体系は終止・連体形と連用形との間に不調和な部分を持ち、とくに4拍動詞については近世中期まで第1類と第2類との間で混同・ゆれが一部にあった。これは、H3型とH2型とが統合したことや、終止・連体形が下降型アクセントのもの、動詞アクセント体系内における不安定性によるものと思われる。

こののち、諸方言アクセントに徴するとH2型とH1型との統合を契機として、動詞アクセント体系の再編が起こるのであるが、4拍動詞第2類が残らず第1類と合同するものこのときである。近世中期まで文献に確認される「ゆれ・混同」と現代京都方言との間に、諸方言アクセントに聞かれる、4拍動詞第1類の安定した時期を想定してよいと思うが、ゆれたり混同したりしていたものが、どうして一方の第1類のみ安定した状態になるのか。また、ゆれをみせる平曲譜本の状態は文語アクセントを反映したのではないか、という疑いも一応は検討すべきだが、平曲以外の資料にもこの様子は看取されるのである⁽⁸⁾。

近世中期以前の資料に見られる「ゆれ」または「混同」は、さほど大きなものではなかったので、類別を大きく混乱させはしなかったものと考えられる。そののち近世後期以後に第1類の安定する時期が、ちょうど近畿中央式諸方言に聞かれるように、京都にもあったのであろうが、これは終止・連体形H0型、連用形H(-2)型（過去形としてみればH(-3)型）という体系がより一層強固になったとみるべきものと思う。なお、平曲譜本における具体的な用例については、奥村和子（1995）が詳しく報告しているので参照されたい。

注

- (1) 「平家正節」の「白声・口説」の曲節を中心に、「指声・折声」の前半部分も参考にした。
- (2) それぞれ例を示せば以下のとおり。〈上・コ〉はアクセントの高拍を〈×〉は無譜で同じく低拍を反映するものと解釈できる。
- | | | |
|------------|---------------|-------------|
| #1: 4V1<4> | 連なる 〈上上××〉 | 2 上殿上23-5白声 |
| #2: 4V1<2> | 唱へ給ふ 〈上××〜〉 | 7 下准水22-1口説 |
| #3: 4V1<4> | 重って 〈上コ×××〉 | 4 上都還 9-2口説 |
| #4: 4V2<2> | 愁レへたる 〈上上×××〉 | 炎上清水 2-1口説 |
| #5: 4V2<4> | 営み給ふぞ 〈上上コ×〜〉 | 7 下重斬39-2口説 |
- (3) これに対して、4V2<2>の連用形は○○○>●○○となつて問題ない。秋永一枝(1991 p.503)に紹介された、『堯惠本古今集開書(延五記)』や『古今私秘聞』にみえる「深めて」〈上平上平〉の例は、この変化の中間段階のものである。
- (4) 徳島市などに聞かれる「アラワシ」(表) ●○○○などは、のちに●●○○と●○○○との統合が進んだ際の変化形と考えられる。●●○○と●○○○との型の統合は、江戸時代後期以降のものである。
- (5) 徳島市における3V2<1・5>の変化については、上野和昭・仙波光明(1993)を、また4V2<1・5>については上野(1994)を参照されたい。
- (6) この点については、服部四郎(1931 pp.16-17)の指摘が早い。
- (7) 一方の極となる4V3についてとくに述べる事がなかったが、その所属語数は極めて少ない。しかしこの再編の時期には、2V2<5>ばかりでなく3V2<1>に加えて、低起式動詞を前部要素とする多くの接合動詞が残らず、低起無核型(終止・連体形)になるので、その数においても十分なものとなる。
- (8) 近世中期と現代諸方言との不連続性については、音声言語研究会の席上、大和シゲミ氏に指摘された。また、平曲譜本が文語アクセントを反映しているのではないかと注意してくれたのは、中井幸比古氏(私信)である。

【参考文献】

秋永 一枝(1991) 『古今和歌集声点本の研究 研究篇下』校倉書房

奥村 和子(1995) 「平曲資料に反映した四音節動詞のアクセント—中世前期以前における低起式動詞の体系に
関して—」『女子大文学(国文篇)』46

奥村 三雄(1981) 『平曲譜本の研究』桜楓社

(1986) 「アクセントの変化—アクセント型式と所属語彙の問題—」
『論集日本語研究歴史編(二)』(宮地裕編) 明治書院

(1990) 『方言国語史研究』東京堂出版

(1993) 「平曲のことばと旋律」
『平家琵琶—語りと音楽—』(上参郷祐康編) ひつじ書房

金田一春彦(1964) 『四座講式の研究』三省堂

桜井 茂治(1984) 『中世京都アクセントの史的考察』桜楓社

坂本 清恵(1990) 「丸本を資料とするアクセント研究の問題点」『国文学研究』100

(1993) 「近世における動詞多数形のアクセント—近松世話物浄瑠璃を資料に—」
『埼玉女子短期大学研究紀要』2

(1994) 「近世上方アクセント資料索引」アクセント史資料研究会

佐藤 栄作(1989ed.) 『アクセント史関係方言録音資料』アクセント史資料研究会

服部 四郎(1931) 「国語諸方言アクセント概観(三)」『方言』1-4

平山 輝男(1960ed.) 『全国アクセント辞典』東京堂出版(京都のアクセント)

(1992-94ed.) 『現代日本語方言大辞典』明治書院(高知・徳島・大阪のアクセント)

上野和昭・仙波光明 (1993)

「徳島市における3拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島大学国語国文学』6

上野 和昭 (1993) 「京都方言アクセントの廻行—近世後期以降の3拍動詞類推変化についての考察」
『国語学』172

(1994) 「徳島市における4拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島大学国語国文学』7

(1995) 「統合と類推—中世後期以降の京都における形容詞アクセント体系についての考察—」『早稲
田日本語研究』3

ほかに「日本語音声」(1990年度) 音声データベース「全国共通項目(1)」(京都市)

(付記) 本稿は、第31回音声言語研究会(1994.4.23 於大阪樟蔭女子大学)で「国語アクセント史と阿波アクセント」と題して発表した内容に基づくものである。